國學院大學学術情報リポジトリ

人種の現象学：
人種化する経験と人種化される経験から人種差別を考える

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小手川, 正二郎, Kotegawa, Shojiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000579

人種の現象学
—人種化する経験と人種化される経験から人種差別を考える

小手川正二郎

はじめに

白人警官によるジョージ・フロイド氏の殺害事件に端を発した人種差別への抗議運動は、アメリカだけでなく世界各地に波及している。日本でも、いわゆる「ハーフ」と呼ばれる人をはじめとした数多くの人たちが、国内の人種差別的な言動に声をあげている一方で、人種的マジョリティに属する人たちのなかには、アメリカでの抗議運動の盛り上がりや日本国内の人種差別に「ピンと来ない」人も少なくないようだ(1)。

多くの日本人は、自分の肌の色を気にとめることがなく、あたかも肌の色がないかのように生活することができ、そのため自分も肌の色で相手を判断したり、差別したりすることはないと思っている。けれども、日本国内でも人種的マイノリティに対する明らかな人種差別や、差別的な言動は頻繁に見られる。そして、国内の人種的マジョリティも、ひとたび海外（とりわけ非アジア圏）に行けば、人種として見られ、扱われる。新型コロナウィルスの感染拡大に伴って、世界各地で東アジア系の住民や留学生、観光客に対する人種差別が生じたが(2)、日本人もこうした人種差別の被害を受けたことは記憶に新しい。

こうした人種差別をめぐる問題に、哲学とりわけ現象学は、いかにして取り組むことができるだろうか。また、日本に住み、主として日本語で研究する哲学研究者は、「人種」の考察にいかなる寄与をなしうるのだろうか。後者の問いに関して筆者は、拙著『現実を解きほぐすための哲学』で、日本の人種的マジョリティの人種観や人種差別的な知覚のあり方を「黄色人種の現象学」として主題化する可能性を探った(3)。本稿では、この主題化の方法論をなす「人種の現象学」についてより細かい検討を加えることで、前者の問いについて考察するとともに、人種の現象学の今後の課題と展望を示すことで、後者の問いをさらに掘り下げて考えていく方途を示したい。

以下ではまず、人種の現象学の先駆的な研究者アルコフの議論に基づいて、「人種」という問題含みの概念に対する三つの立場を紹介し（第１節）、人種の現象学の位置づけと着眼点を示す（第２節）。次に、相手を特定の人種として見る（「人種化する」）差別者の知覚経験の特徴について、アル＝サジの議論に沿って検討する（第３節）。さらに、こうした人種差別的な知覚を被る（「人種化される」）被差別者たちの経験を身体性という次元で捉え直すことを試みる（第４節）。最後に、人種の現象学の今後の課題として、人種というカテゴリーとジェンダーや階級といったカテゴリーとの「交差性」という観点の必要性と、差別者と被差別者の境界線の揺らぎという論点の重要性を示したい（第５節）

１．「人種」に関する三つの立場

「人種」（race）という言葉を用いる際、人々はそれが遺伝子のような形で、あたかも物理的に実在するものだとみなしやすい。けれども、今日では、黒人や白人、あるいはアフリカ人やヨーロッパ人に対応するような遺伝子の組み合わせが存在するなどといったことは、科学的に否定されている(4)。

こうした事実を受けて、人種という概念をめぐっては、以下の三つの立場が考えられる(5)。

（１）唯名論（nominalism）

人種が科学的には存在しないという事実から、人種に関する諸概念は実在するいかなる指示対象ももたないと結論づける立場は、唯名論的立場と呼べる。この立場に立つなら、人種差別が生じるのは、人種に関する非科学的で差別的な概念を用いているから、ということになり、そのため人種差別に反対するためには、人種に関する諸概念を使わないようにすることが肝要となる。その結果、「すべての人は同じ人間である」ことを強調して、肌の色を見ない・見えないようにしたりする「カラーブラインドネス」の戦略に傾きがちである。

こうした立場は、人種には生物学的な意味とは異なる意味があり、人種に関する諸概念が非生物学的な指示対象をもつことを看過してしまっている。また、人種に関する諸概念を廃棄したとしても、社会に蔓延している人種をめぐる社会構造や経済構造が解消されるとは考え難い。

（２）本質主義（essentialism）

これに対して、人種という概念は、人種集団のメンバーが共有する一連の特徴という本質をもつとみなす立場は、本質主義と呼ばれる。こうした立場によれば、それぞれの人種集団は、人種に特有な自然的な特徴だけでなく、政治的利害や歴史的な運命を共有しているとみなされる。そして人種差別を是正するために必要なのは、人種に関する諸概念を廃棄することではなく、人種に関する記述の内容

を変えることだとされる。

私たちが一般に、人を黒人・アジア人・白人等々に瞬時に分類してしまっている事実、そしてそうした分類によって差別され、傷つけられ、さらには殺されてしてしまう人々が現に存在しているという事実に向き合うために、こうした立場はそれなりに有効かもしれない。けれども、本質主義は、個々人の人種が容易に画定可能だとみなしたり、人種集団の捉え方が一様であり続けると想定したりする点で、人種に関する意味がゆれ動いたり、更新されたりするという事実を捉え損ねている。

（3）文脈主義（contextualism）

人種に関する現実を説明すると同時に、人種差別に批判的であるためには、人種という概念が社会的に構築され、歴史と共に変化し、文化的な文脈のなかにおかれ、学習された知覚的な実践を通して再生産されているとみなす文脈主義的立場が有効だと考えられる。こうした立場によれば、「人種的な概念を用いることが妥当かどうか、人種的な概念の使用が肯定的な政治的効果をもつか、否定的な政治的効果をもつかは、文脈に依存する[(6)]」と考えられる。

文脈主義は、各々の社会や文化における人種をめぐる考えや実践について説明すると同時に、人種に関する支配的な見方が変化したり、衰退したりする可能性についても考えることを可能にする。こうした立場に立てば、個々人の人種的な同一性や境界線が偶然的だったり不確実性だったりすること、また、人種に関する諸概念が人々の実践を通じて維持されたり変容されたりする一方で人種が現実的なものとして日々経験されているということを分析することができるようになる。

2．人種の現象学

文脈主義の立場からも、さらに客観主義的アプローチと主観主義的アプローチという二通りのアプローチが可能だ。客観主義的なアプローチは、人種概念の内容や政治的含意が文脈によって規定されるとする一方で、文化や社会に応じて多様な文脈をまたがって適用可能な一般的な人種の定義を探求しようとする。それは、三人称的な観点から、人種をめぐる歴史や文化的伝統、植民地化のプロセスを分析することで、人種がそれぞれの社会でいかなる役割や意味をもつのかを考察する。

客観主義的アプローチは、マクロなレベルで人種の役割や意味を考察するために必要不可欠であるが、それだけでは、人種に関する経験の日常性、つまり「人種化が作動し、再生産され、時として新たな意味を与えられるミクロなレベルでの相互関係」がとりこぼされてしまいかねない。

主観主義的アプローチは、他人を特定の人種として見る経験や自分が特定の人種として見られる経験を、経験している人の一人称的観点から記述し分析することで、「人種がいかにして身体的な経験、主観性、判断、認識的な諸関係を構成しているのか[(7)]」を解明しようとする。人種の現象学は、文脈主義的立場に立った主観主義的アプローチを軸にした考察方法として位置づけられる。

では、こうしたアプローチから、人種に関する経験はどのように分析されうるのだろうか。現象学的アプローチは、当事者の経験から出発することで、人種差別と呼ばれているものの複数の層を解明することに寄与する。

一般に、人種差別とは、肌の色などの身体的特徴に基づいて、危害を加えたり、不利に扱ったり、侮辱したり、排除したりすることだと考えられている。例えば、警官が黒人の容疑者に過度な暴力を加えたり、「黒人だから」という理由で雇用しなかったりマンションの賃貸契約を断ったり、日本人に対して「吊り目のジェスチャー」をしたり「ジャップ」と呼んだりすることは、明らかな人種差別とみなせる。こうした明示的な差別行為においては、差別者による被差別者に対する意図的かつ明確な差別的メッセージが読み取られる。被差別者（ないし差別の目撃者）がこうした行為に対して「怒り」を感じるのは、それらが公平な取扱いや人格の尊重といった原則に反する「不正」、しかも差別者による意図的な不正として認識されるためであろう。

これに対して、一見すると明確な「差別」とは言えない人種的マジョリティの振舞いや対応もまた、人種的マイノリティからすると「差別的」だと感じることがある。例えば、夜の街頭で黒人男性とすれ違った白人女性がバッグを引き寄せる、人種的マイノリティが至るところでジロジロ見られる、レストランや電車のなかでそれとなく避けられるといったことである。こうした振舞いは、相手を特定の人種として知覚するや否や、不意に生じる身体的な「反応」とみなされやすく、そこに行為者の明確な差別的意図を読み取ることも難しい。そのため、人種的マイノリティがこうした振舞いに何度も遭遇して感じる疲れやストレスは、自意識過剰などと揶揄されたり、無視されたりしがちである。

人種の現象学の研究者であるヘレン・ンゴは、こうした振舞いを、身体化された人種差別的習慣（racist habits）として問題化している[(8)]。これらは、人々を（科学的には存在しない）特定の人種カテゴリーに分類し、それに付与されるステレオタイプや文化的・社会的イメージのもとで相手を見る「人種化」（racialization）を前提としている。それゆえ、仮にこうした振舞いをする人が人種差別的な意図や考えをもっていなかったとしても、その振舞いは特定の人種を危険視したり、社会の異分子とみなしたりする当該社会の支配的な人種観に参与し、それを具現化してしまっている[(9)]。

このような観点は、目に見える明確な人種差別やマクロなレベルでの人種差別的な社会構造（人種間の教育格差や経済格差）とは異なった水準で、つまり社会

の支配的な人種観が日常的に具現化されている人種的マジョリティの人種差別的な身体習慣、およびそうした振舞いを日々被っている人種的マイノリティの身体性（embodiment）という次元で、人種差別を捉え直すことを可能にする。以下では、このような観点から、差別者の経験——人種的マジョリティによる相手を人種化する知覚の特徴——と被差別者の経験——人種的マイノリティが日々人種化する知覚に対して行なっている「適応」の特徴——がいかに分析されうるかを示したい。

３．差別者の経験——相手を人種化する知覚の特徴

人種の現象学の第一人者であるアリア・アル＝サジは、相手を特定の人種として見るという「人種化する知覚」を、通常の知覚との対比のもと、（１）知覚の受容性の制限と（２）人種の自然化という二つの側面から特徴づけている[10]。

そもそも人は、生まれた時から「物が見える」わけではなく、学習や経験を通じて、物との適切な距離のとり方、特徴の捉え方、他の物との見分け方等を徐々に学んでいく。そのようにして見方の習慣が徐々に身についていくことで、いつしか物を瞬時に見分けることが可能となる。

人種化する知覚もまた、学習や経験を通じて知らぬ間に習慣化された見方の一つだ。けれども、人種化する知覚と、通常の知覚には決定的な違いが存在する。ある人を特定の人種として見ると、人種のステレオタイプに沿うような特徴ばかりが目について「それ以外の仕方では見えな」くなり、なおかつそうした特徴が相手の身体に備わる自然的な特徴のように見えてしまうのだ。

（１）知覚の受容性の制限

例えば、アフリカン・アメリカンの哲学者ジョージ・ヤンシーは、黒人だからといって危険視されないように、きちんとスーツを着てネクタイをしていたにもかかわらず、エレベーターに入ると居合わせた白人女性がバッグを引き寄せ、明らかに自分に不安や恐怖を感じる様に直面して、彼女は「一人の黒人を見ている」のであって、「私を本当に「見ている」のではない」と述べている[11]。こうした時、彼女の知覚には何が起こっているのだろうか。

通常、見慣れない物や人を見る場合、最初は特徴を捉えるのに苦労するが、徐々に慣れて細かな特徴にも目が向くようになる。つまり、通常の知覚では、知覚される物や人の影響を受けて、見方の習慣が更新されたり、変容したりする可能性（知覚の受容性）がつねに残されている。

これに対して人種化する知覚の場合、相手の人種的な特徴以外に注意が向いていくことがなく、自らの習慣的な見方とは異なる見方の可能性が塞がれてしまう。そこでは、見方の習慣が固定化され、知覚対象はその習慣に沿った形でしか知覚

されない。

> 人種化する知覚において封じ込められてしまうのは、視覚の受容性（receptivity）、つまり自らの習慣的な対象化する図式を越えて、あるいはその下にあるものによって影響を受け、触れられるような視覚の能力である。人種化する視覚の「私はできない」〔別の仕方で見ることができない〕が制限しようとしているのは、予期されない（そしてただちには認識可能でない）差異に対する開放性、すなわち通常は知覚習慣の変動する即興的な性格のもととなっている情動的な開放性なのだ(12)。

マスメディア等で度々表象されてきた「黒人」像の影響によって、黒人をもっぱら粗野で危険な人として見ることが習慣化された人にとっては、相手を「黒人」とみなすや否や、「それ以外の仕方で見る」可能性が著しく制限されている。このようにして、通常の知覚に備わっている受容性が制限され、人種のもとでステレオタイプ化された身体だけを見て、生きている身体を見ることができない点で、人種化する知覚は通常の知覚以下のものなのだ。

（2）人種の自然化

他方、人種化する知覚は、通常の知覚には含まれない機能をもつ。通常、人はたんに物や人の物理的特徴だけを見ているわけではなく、それが位置する歴史的・文化的な背景と一緒に物を見ている。例えば、万里の長城を見る場合、たんなる石の集積として知覚するわけではなく、長い歳月をかけて築かれ、中国の文明を象徴する歴史的・文化的なものとして知覚する。

これに対して、人種化する知覚の場合、人種を相手の身体の「自然的な」特徴とみなすことで、人種という概念が生まれ、機能している歴史的・文化的背景——白人たちによる植民地支配や人種差別の歴史、現代でも根強く続く白人を優位に置く文化——から切り離してそれを見ようとする。例えば、エレベーターの事例で、ヤンシーに対して不安や恐怖を感じた白人女性は、自らの人種差別的な考えゆえにヤンシーを危険人物だと判断したのではなく、彼の肌の色や体格が彼女に不安や恐怖を感じさせたのだと主張するかもしれない。アル＝サジによれば、こうした反応こそが、まさに人種化する知覚における「人種の自然化による自己正当化」という特徴に他ならない。

> 自らを愛し自らを正当化する運動のなかで、見ることの人種化する習慣は、自らの原因を知覚される身体のうちに刻み込み、知覚される身体に対する客観的ないし自然な反応として自らを措定する。このような仕方で、こうした習慣は

人種差別を正当化する[13]。

人種化する知覚は、知覚の原因が見られている身体のうちにある自然的な特徴（肌の色や体格）とみなす、つまり人種を「自然化」（naturalize）することで、自らの知覚を「客観的な」ないし「自然な」反応だとして、自己正当化を行っている。

実際には、「黒人」と呼ばれる人々の肌の色やその他の身体的特徴は千差万別である。にもかかわらず、一人一人のルーツの違いや実際の肌の色に頓着せずに、彼らを押しなべて「黒人」と呼んでしまえるのは、人種による分類を（ある意味で）自明なものとし続けている歴史的・文化的背景があるからだ。人々はそうした歴史的・文化的背景から目を逸らし、「肌の色が黒いから黒人なのだ」という形で、人種を「自然化」する。そうすることで、自分たちの知覚を相手の身体的な特徴（肌の色）に対する「客観的な知覚」だとみなすと同時に、相手に対する自分の反応（不安や恐怖）を相手の身体の「自然的な特徴」（肌の色や体格）に対する「自然な反応」だとみなして、自分の知覚と感情を正当化してしまうのだ。

このように、人種化する知覚は、（１）知覚の受容性を制限すると共に、（２）人種を自然化して自己正当化する点にその固有性があると考えられる。

４．被差別者の経験——人種化する知覚に対する身体的適応

以上のような人種化する知覚によって見られる人種的マイノリティは、日々、どのような経験をしているのだろうか。

ンゴによれば、人種的マイノリティは、日々、自分を人種化してくる知覚の体制に対する「身体的な適応」（bodily adjustment）を行っている[14]。例えば、バングラデシュ出身のオーストラリア人は、行政手続きのために窓口の白人女性と話す際、笑顔で、普段よりも高く明るいトーンで話すよう骨をおると言う。ジンバブエ出身のオーストラリア人は、夜遅くバスに乗車した際、自分と同じ停留場で降りる白人女性がいるときは、すっくと立って、ただちに降車用のボタンを押し、まっすぐ帰路につこうとする。白人女性に「あなたの後をつけているのではありません。ここで私も降りるので」ということを読み取ってもらえるようにするためだ。こうした身体的な適応はどれも、人種的マイノリティを人種化して否定的な反応を示す人種的マジョリティの習慣的な知覚を先取りして、それを避けたり、中断したりすることを目指してなされている。

人は誰しも、日常的に身体的な適応を行っている、つまり周囲の環境や場の雰囲気にあわせて、あえて意図することもなく身体的な振舞いを変えている。例えば、就職活動の面接時には礼儀正しい振舞い方をするだろうし、結婚式や葬儀に参列する際はそれぞれ別の形でおごそかな雰囲気にあうような身のこなし方をす

る。これらの場面でも、場にそぐわない行動をした際に周囲の人から示される否定的な反応が先取りされて、そうした反応を避けるために、身体的な適応が行なわれている点に変わりはない。しかし、こうした日常的な形での身体的な適応は、特定の場面やイベント時に限られ、そうした場から離れたりイベントが終わったりすれば身体的な適応をする必要はなくなる。

これに対して、人種化する知覚に対する身体的な適応の必要性は、特定の場面やイベント時に限られない。人種的マイノリティは、例えば、公園を散歩しているとき、通りを歩いているとき、エレベーターに乗るとき、買い物をしているときといった日々の生活のなかで、いつでも不意に人種として見られ、人種として扱われることに遭遇する。

ンゴによれば、こうした、いつでもどこでも人種化され、それに対して適応しなければならないという身体的な適応の「遍在性」（ubiquity）ないし「非イベント性」（non-event-ness）こそ、人種的マイノリティが「安定した」身体的な行動様式（身体図式）を形成するのを困難にしている(15)。実際、黒人奴隷の祖先をもつフランスの哲学者フランツ・ファノン（1925-1961）は、白人中心的な社会で生きる黒人の経験を分析した『黒い皮膚・白い仮面』（1952年）で次のように述べている。

> 白人の世界においては、黒人は自己の身体図式（schéma corporel）を構成するのに多大の困難に出会う。身体の認識はひとえに否定的な作業である。それは第三人称での認識だ。身体の周囲一面を確実な不確実性（incertitude certaine）の雰囲気が覆っている(16)。

いつでもどこでも人種として見られ、扱われかねないという可能性が、自分の身体のあり方や振舞い方に自信や確信をもつことを妨げ、それらに第三者による人種化につねに脅かされた「不確実性」――白人の世界において「確実に生じうる不確実性」――を付与する。以上のような身体的な適応の遍在性や、自分の身体に付与される不確実性が、人種的マイノリティが日々経験している疲れやストレスの主要な要因を形づくっていると考えられる。

5．人種の現象学の課題と展望――交差性と差別者／被差別者の境界線の揺らぎ

以上のように、人種の現象学は、差別者と被差別者それぞれの経験から出発することで、従来の研究では光が当てられにくかった人種差別の身体性を考察することを可能にした。こうした分析をさらに推し進めるために、今後検討されるべき論点を素描しておきたい。

（1）交差性（intersectionality）

ある人が特定の人種として見られたり扱われたりする際、しばしばその人に帰属させられる他の属性も巻き込んだ形でなされる。例えば、黒人男性はたんに人種という側面からだけでなく、男性というジェンダーの側面から見られたり、貧困層という社会階級の側面とともに見られたりすることで危険視されやすい。また、日本における「ハーフ」の男女は、歴史的に日本の人種的マジョリティよりも性的に「奔放」とみなされてきたが[17]、例えばいわゆる「白人ハーフ」の男性が女性を誘惑するのに長けた男性として見られやすいのに対して、「白人ハーフ」の女性は乗りのよい「軽い」女性として見られやすい。同じ「人種」とみなされたとしても、他の属性ゆえに異なる見方をされたり、対応をされたりすることがあるのだ。

こうした場合、「人種」や「ジェンダー」や「階級」といったカテゴリーの交差（intersection）——それぞれのカテゴリーにまつわる差別のたんなる加算ではなく、それらの相互作用と絡みあい——において、人種差別的な知覚やそれに対する身体的な適応の特徴が考察されねばならない[18]。

以下、欧米におけるアジア系の人々への人種差別について考察する際、ジェンダーや階級といったカテゴリーとの交差性を考えることがいかなる分析につながりうるか、展望を示しておく。ジェンダーの場合、いわゆる「黄色人種」として人種化される東アジア系の人々が異性の白人と共にいると差別的なまなざしのもとで表象されることがあるが、男女によってその表象のされ方は異なってくる。例えば、中国の劇作家、洪深（1894-1955）は、ニューヨークに留学中に白人女性と連れ立って入った映画館で、次のような人種差別にあった経験を記している。

> ある晩、わたしは彼女と映画館で映画を見ていた。隣は少し酒に酔った客であり、わたしたち二人の姿が目に入るとつぶやきはじめた。独り言で「チャイニーズ……チャイニーズの洗濯屋……なんで、まともできれいな女がチャイニーズと一緒にいるんだ……俺はチャイニーズなんかよりずっとましだぞ」など酔ったまま話している！　最初はまだ声が低かったが、やがて次第に大きくなった。ついにわたしは耐えきれなくなり、「黙れ（Shut Up）」と大声で叱り飛ばし、立ち上がって殴ろうとした[19]。

逆に、白人男性と付きあうアジア系の女性はどのような差別的なまなざしを受けるのか。水村美苗『私小説——from left to right』（1995年）には、アメリカで教育を受けた姉の奈苗がニューヨークのお洒落なバーにポーランド人の恋人Henrykと入った際、「馬鹿にされないようにきっちりとした恰好」をし、「きっちりとした英語を使った」にもかかわらず、酔った恋人が彼女に無理矢理キスをするのを見かねた白人のバーテンダーから「行儀よくしなさい」と言われ、「あ

なた方二人は、このような場所に、ふさわしいとは思えません」と言われたことに言及している。奈苗は妹の美苗に次のように訴える。

> あたしがもし白人の女の人だったら、あのbartenderだって、あそこまで失礼なものの言い方はしなかったんじゃないかって……少なくともあたしに向かってはね。だって、あたしがもし白人だったら、あたしがいやがってるってことぐらい気がついてあたりまえだったんだから。Henrykと一線を画そうとしていたことにだって。Because it was so obvious. でもあたしが東洋人なもんだから、そんな細かいことは見えなかったんだと思う。ああいうclassの人じゃ、いろんな東洋人がいるってこと、よくわかってないでしょう。なにしろあたしのことなんか、一度だって顔をまともに見なかったんだから。入って来たときだって、髪の長い東洋女が入って来たぐらいにしか思わなかったのかもしれない。だから、なんか変なのが二人でヨカラヌコトヲしてるってしか思わなかったんでしょう[20]。

これに続けて奈苗は、Henrykが安く見られたのは、東洋人女性である自分——一部の白人男性には「東洋の尻軽女」にしか見えない自分——を連れていたからだと述べている。

上記の二つの例は、時代背景や文脈は異なるものの、人種とジェンダーの交差性について興味深い論点を提供している。前者の例では、「まともできれいな」白人女性をアジア系男性に「奪われた」という不当な怒りや嫉妬に満ちた人種差別的な知覚が問題となっており、その前提には「白人女性」は「白人男性」と付き合うべきだという男女観・人種観がある。後者の例では、流暢な英語を話し拒絶の意志を示すアジア系女性を、酔った白人男性と「ヨカラヌコトヲしてる」「尻軽女」としか見ない人種差別的な知覚が問題となっており、その前提には「東洋人女性」と付き合う「白人男性」への蔑みがある。以上のような相違について、人種差別的な知覚とジェンダーの知覚の交差性という観点から、掘り下げて検討していくことが可能だろうし、必要となるだろう。

（2）差別者と被差別者の境界線の揺らぎ

人種をめぐる従来の議論は、主として「白人」と「黒人」（ないし「有色人」）の二項対立——人種化する差別者と人種化される被差別者——に焦点を当て、時として他の人種グループを見過ごしてきた[21]。黒人に対する人種差別が今日でもなお苛烈を極め、根絶されねばならないことは言を俟たない。けれども、「人種は黒人と白人以上である[22]」ことも確かであり、人種差別の多層的な構造とそれが各々の社会や文化において具現化される仕方を分析するためにも、黒人にも白人にも区分けされることがない人々の人種経験を考慮に入れる必要がある。

北米においては、アジア系の人々の人種経験は主としてアジア系アメリカ人の文脈で議論され、例えばアジア系が勤勉で自己主張することが少ない「模範的マイノリティ」（model minority）として表象されることなどが取り上げられてきた[23]。しかし、アジアの国々に住む人々の人種経験は充分に議論されてきたとは言い難い。自国では人種的マジョリティに属しながら、他国では人種差別の被害者になりうる人々の人種観に迫る一つの方途として、筆者は日本の人種的マジョリティが海外（とりわけ欧米）で経験する人種体験に着目してきた[24]。そうした体験に関連してしばしば言及されるのは、自国では人種的マイノリティを差別視する人種的マジョリティに属する人々が、他国で差別される側に立たされる際に感じる、差別者と被差別者の境界線の揺らぎである。水村美苗は、アメリカで不意に自分が「東洋人」や「有色人種」として扱われる際の驚きを、次のように描写している。

> 実際〔自分が〕東洋人であるのを知ること自体に驚きがあるのではなかった。自分が東洋人であるのを知る驚きとは、それは西洋人から、あなたは向こう側の人間です、と私から見ても向こう側の人間と一緒くたにされてしまう驚きであった。しかも、私自身彼らではないことを幸せの一つとひそかに数えている人間と一緒くたにされてしまうことに対する驚き――そして屈辱であった[25]。

「彼らではないことを幸せの一つとひそかに数えている人間と一緒くたにされてしまうことに対する驚き」は、幼い頃からアメリカで暮らしてきたがゆえに日本に生まれ育った日本人とは一線を画する水村に固有なこととは限らない。こうした驚きは、西洋に由来する様々な価値観を内面化し、欧米で白人のように遇されることに喜びを感じる少なからぬ日本人や「有色人」にあてはまることだと思われる。実際、欧米において人種差別的な経験をする日本人や「有色人」は、欧米で一定期間生活をする経済力と現地の言語をある程度理解する語学力をもちあわせていることが多く、教育の過程で西洋的な価値観を少なからず内面化させている人々でもある。

こうした点は、「人種」と「階級」の交差性にも関わるが、自国で人種的マジョリティである「有色人」が、自国においてもなお白人中心的な人種観から自由ではないという事実とあわせて考察する必要があるだろう。そうした考察を深めていけば、日本の人種的マジョリティが、自分たちが海外で受ける人種差別には敏感に反応する一方で、日本国内で自分たちが差別する側に立ち、人種的マイノリティに対して差別的なまなざしを向けやすいことにしばしば無自覚であったり、「日本に人種差別は存在しない」と言ってしまったりするのはなぜなのかを再考することにつながると思われる。

注

（1）日本の人種的マジョリティが国内の人種差別に気づかなかったり、それを「差別」とはみなさなかったりするのが、どうした背景に由来するのかについては、ケイン樹里安「「人種差別にピンと来ない」日本人には大きな特権があるという現実――「何気ない言動」が問われている」、『現代ビジネス』、2020年６月26日（https://gendai.ismedia.jp/articles/-/73518）参照。

（2）2020年２月24日ロンドンに留学していた中国系シンガポール人の男性が人種を理由に暴行を受け、顔面の複数個所を骨折した。３月１日にはパレスチナでNGOスタッフの日本人女性２人がパレスチナ人女性２人から「コロナ、コロナ」とからかわれた後に、つかみかかられ、現地知事が謝罪するという事件が起きた。アメリカでは、３月19日から１週間で、カリフォルニア州や東部ニューヨーク州を中心に、差別による嫌がらせなどの被害を受けたという報告が673件寄せられた。

（3）小手川正二郎『現実を解きほぐすための哲学』、トランスビュー、2020年、第２章参照。

（4）ベルトラン・ジョルダン『人種は存在しない――人種問題と遺伝学』、林昌宏訳、中央公論新社、2013年。科学的な無根拠性が明らかな「人種」という概念が、現代においても様々な局面で利用されてしまう背景や経緯については、アンジェラ・サイニー『科学の人種主義とたたかう―人種概念の起源から――最新のゲノム科学まで』、東郷えりか訳、作品社、2020年参照。

（5）Linda Martín Alcoff, *Visible Identities：Race, Gender, and the Self*, Oxford/New York：Oxford University Press, 2006, p. 182.

（6）*Ibid.*

（7）*Ibid.*, p. 183.

（8）Helen Ngo, *Habits of Racism：A Phenomenology of Racism and Racialized Embodiment,* Lanham/Boulder/New York/London：Lexington Books, 2017.

（9）*Ibid.*, p. 17.

（10）以下の議論については、以下の論考を参照。Alia Al-Saji, A Phenomenology of Hesitation：Interrupting Racializing Habits of Seeing, in：Emily S. Lee（ed.）, *Living Alterities：Phenomenology, Embodiment, and Race,* New York：SUNY, 2014.

（11）George Yancy, *Black Bodies, White Gazes：The Continuing Significance of Race,* Lanham, MD：Rowman & Littlefield, 2008, p. 21.

（12）Alia Al-Saji, ibid., p. 140.

（13）Alia Al-Saji, ibid., p. 138.

（14）Helen Ngo, *Habits of Racism：A Phenomenology of Racism and Racialized Embodiment,* pp. 57-59.

（15）Ibid., pp. 68-76.

（16）Frantz Fanon, *Peau noire, masques blancs,* Paris：Seuil, 1952. フランツ・ファノン『黒い皮膚、白い仮面』（『フランツ・ファノン著作集』第1巻）、海老坂武・加藤晴久訳、みすず書房、1970年、78頁。

（17）下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」――ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』、青土社、2018年、292-306頁。

（18）Kimberle Crenshaw, Demarginalizing the Intersection of Race and Sex：A Black Feminist Critique of Anti-Discrimination Doctrine, Feminist Theory and Anti-Racist Politics, in：*The University of Chicago Legal Forum* vol. 140, 1989.

（19）洪深「Ada（二）」（1935年６月13日）、中村みどり「洪深のアメリカ留学体験――自伝にお

ける人種差別・恋愛、そして演じること」、熊谷謙介編著『男性性を可視化する――〈男らしさ〉の表象分析』、青弓社、2020年所収、109頁より引用。

(20) 水村美苗『私小説――from left to right』(1995年)、筑摩書房、2009年、301頁。この小説については、藤野寛先生からのご教示を賜った。記して感謝する。

(21) こうした傾向は、近年見直され始め、ラテンアメリカ出身者を指す「ラティーノ」を主題とする優れた現象学的研究も公刊されている。Mariana Ortega, *In-Between : Latina Feminist Phenomenology, Multiplicity, and the Self,* Albany : SUNY, 2016.

(22) Frank H. Wu, *Yellow : Race in America beyond Black and White,* New York : Basic Books, 2002, p. 18.

(23) Cf. Frank H. Wu, *op. cit.* ; David Haekwon Kim, Shame and Self-revision in Asian American Assimilation, in : Emily S. Lee, *Living Alterities : Phenomenology, Embodiment, and Race,* New York : SUNY, 2014.

(24) 拙著『現実を解きほぐすための哲学』(トランスビュー、2020年)では、フランス留学時の人種経験を書き残した遠藤周作の一連の著述にその手がかりを求めた。

(25) 水村美苗『私小説――from left to right』(1995年)、筑摩書房、2009年、253-254頁。262頁も参照。